

日本語の文章における丁寧体と 普通体の混用について

—— 学術論文における謝辞の文章の分析を通して ——

黒 木 晶 子

1. はじめに

本稿は、学術論文における謝辞の文章を材料に、丁寧体（「です・ます」体）と普通体（「だ・である」体）の混用が見られる文章の特徴を明らかにしようとするものである。

既に、丁寧体と普通体の混用については、野田（1998）が文章・談話の構造という観点から考察を行っている。

本稿では、考察対象を特に学術論文における謝辞の文章に限定し、そこで見られる丁寧体と普通体の混用について、野田（1998）の主張にもとづき検討を行う。その上で、学術論文の謝辞における丁寧体と普通体の混用が、謝辞の内容が特定の個人に向けられたものであるか否かという点からも説明できることを指摘する。

2. 先行研究のまとめ、および本稿の目的

2.1. 先行研究のまとめ

文章・談話における丁寧体と普通体の混用を扱った研究は既にいくつかなされている。その中で野田（1998）は、丁寧体と普通体の混用の問題について、文章・談話の構造という、これまでの研究では扱われなかった観点から説明を行っている。

野田氏は、文章・談話を構成する文を、聞き手に対する意識の強さに応じて、表1に示すような5つの種類に分類している。

そして、表の下の方に位置する文ほど聞き手に対するはたらきかけが強い内

表1 文章・談話を構成する文の種類

心情文	話し手の心情を表す文
従属文	ほかの文に従属している文
事実文	事実だけを客観的に述べる文
主張文	判断や説明を表す文
伝達文	質問や命令を表す文

※野田（1998：p.95）をもとに作成。

容を表し、丁寧体になりやすく、逆に、表の上の方に位置する文ほど聞き手に対するはたらきかけが弱く、普通体になりやすい、としている。

2.2. 本稿の目的

本稿で言う学術論文の謝辞とは、例(1)のように、論文を書くにあたって受けた指導や調査への協力に対する礼を述べた文章のことである。通常、論文の末尾に記されることが多い⁽¹⁾。

- (1) 本稿の一部は〇〇⁽²⁾大学特別研究助成によるものである。また、〇〇の御厚意によりデータの分析・引用の許諾をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。(『日本語教育』101号より抜粋)

論文の本文は、文体⁽³⁾に着目した場合、普通体で書かれるのが一般的である。これに対して、謝辞の文章の文体は必ずしも統一されていない。筆者は、先に日本語教育、日本語学、国語学の分野に関わる学術誌に1998年から2000年までの間に掲載された論文計206編を調査した⁽⁴⁾。そのうち95編で謝辞の文章が記されていたが（謝辞の総数は96⁽⁵⁾）、これらの謝辞を文体のタイプによって分類すると、表2のようになる。

表2が示すように、本稿で考察の対象とする丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞の文章は、先の調査における調査対象全体の17%を占めている。これは、論文の本文においては一般的に丁寧体と普通体の混用が見られないことを考え

表2 学術論文における謝辞の文章の文体

文体のタイプ	該当する謝辞の数	調査した謝辞全体に占める割合
丁寧体のみ	27	28%
普通体のみ	53	55%
丁寧体と普通体の混用	16	17%

※黒木（2001：p.119）の表2を再掲。

ると⁽⁶⁾、極めて特徴的なことである。このように謝辞という内容的に同質の文章でありながら使われる文体が必ずしも統一されていないのは、そこにどのような要因が関わっているからなのか。これが本稿の考察の動機であり、学術論文の謝辞を調査対象とする理由である。

以下、本稿では特に、表2に示すもののうち、丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞16例について考察を行う。それによって、学術論文の謝辞の文章において丁寧体があらわれる箇所と普通体があらわれる箇所とでは、それぞれどのような特徴があるのかを明らかにする。

3. 丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞の文章の特徴

3.1. 丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞の文章の構成要素

学術論文における謝辞は内容的にいくつかの要素が組み合わさって構成されている。それらは、「位置付け」、「恩恵」、「礼」の3つに大別される。以下、各構成要素について簡単に説明する。

「位置付け」とは、その論文が、論文執筆者の他の研究との関係においてどのような位置にあるものかを説明した箇所である（例(2)）。

- (2) 小稿は、1997年国語学会秋季大会（〇〇大学）での口頭発表の内容をもとにしたものである。 （『国語学』192号より抜粋）

「恩恵」とは、その論文を書くにあたって論文執筆者がどのような助言や協力を受けたかということを説明した箇所である（例(3)）。

- (3) 本稿の執筆に際し、草稿の段階で、〇〇先生、〇〇氏、〇〇氏に読んでいただき、貴重なコメントを頂いた。（『日本語科学』3号より抜粋）

「礼」とは、お礼の言葉そのものを指す（例(4)）。

- (4) 記して感謝申し上げます。（『日本語科学』3号より抜粋）

本稿で考察の対象とする謝辞16例を構成要素の組み合わせによって分類すると、表3に示すように、大きく3つのタイプに分けることができる。ここで、表3に見られる、謝辞の構成要素の組み合わせの例を示す。

まず、「位置付け＋恩恵・礼」型の謝辞とは、例(5)のようなものである。

- (5) ①本稿は平成11年度日本語教育学会秋季大会における口頭発表の内容に加筆し、修正を加えたものである。【位置付け】②貴重なご意見、ご指摘を下さった方々に心より感謝申し上げます。【恩恵・礼】

（『日本語教育』107号より抜粋）

※【 】内に、それより前の部分がどの構成要素に該当するかを記す。また、各文の前の数字は引用者による。以下の用例についても同様である。

この型の謝辞は、「恩恵」と「礼」を一文に含む。例(5)の文②の「貴重なご意見、ご指摘を下さった方々」という部分が、謝辞の相手を示すとともに、書

表3 謝辞の構成要素の組み合わせ（丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞の場合）

謝辞の構成要素の組み合わせ	該当用例数
「位置付け＋恩恵・礼」型	6
「位置付け＋恩恵＋礼」型	5
「恩恵＋礼」型	5

※「＋」の記号は、この記号の前後に来る要素が組み合わさって謝辞の文章を構成していることを示す。「・」の記号は、この記号の前後に来る要素が組み合わさって一文を構成していることを示す。

き手が受けた恩恵の内容を示している。この部分のあとに、「心より感謝申し上げます」という「礼」の言葉が続いている。

次に、「位置付け＋恩恵＋礼」型の謝辞とは、例(6)のようなものである。

- (6) ①本稿は、第48回〇〇大学文学部日本文学科研究会での口頭発表の内容をまとめたものである。【位置付け】②研究会においては、諸先生方から有益かつ貴重な御助言を賜わることができました。【恩恵】③この場を借りて、感謝の意を表します。【礼】（『日本語教育』105号より抜粋）

この型の謝辞では、各文が一つの構成要素を含んでいる。

第3番目の「恩恵＋礼」型の謝辞とは、例(7)のようなものである。

- (7) ①本稿をなすに当たり、査読後に編集委員会より適切な指摘を頂いた。
【恩恵】②その結果、有益な加筆・修正を施すことができた。【恩恵】
③編集委員の諸先生に対し、厚く御礼申し上げます。【礼】

（『国語学』197号より抜粋）

3.2. 謝辞の構成要素の組み合わせと丁寧体と普通体のあらわれ方

次に、3.1で見た、謝辞の構成要素の組み合わせごとに、どの構成要素に丁寧体もしくは普通体があらわれているかを調べたところ、表4（次頁）のような結果を得た。

表4から明らかなことは次の通りである。

丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞では、

- ①「位置付け」は常に普通体で書かれている。
- ②「恩恵」は、謝辞の構成要素の組み合わせにより使われる文体が異なる。

「位置付け＋恩恵＋礼」型では、丁寧体で書かれる場合と普通体で書かれる場合の両方がある。

- ③「礼」は常に丁寧体で書かれている。

表4 謝辞の構成要素の組み合わせごとに見た
丁寧体と普通体のあらわれ方（丁寧体と
普通体の混用が見られる謝辞の場合）

謝辞の構成要素の組み合わせ	該当用例数
「位置付け＋ <u>恩恵・礼</u> 」型	6 ⁽⁷⁾
「位置付け＋ <u>恩恵</u> ＋ <u>礼</u> 」型	3
「位置付け＋ <u>恩恵</u> ＋ <u>礼</u> 」型	2
「 <u>恩恵</u> ＋ <u>礼</u> 」型	5

※ 部分が丁寧体が使われているところである。

すなわち、謝辞を構成する要素によって、使われる文体にある傾向が見られるということである。このことについて、次節において、野田氏が主張する文の種類という観点から検討を行う。

4. 謝辞の構成要素ごとに見た丁寧体と普通体のあらわれ方

4.1. 「位置付け」が常に普通体で書かれることについて

丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞において、「位置付け」は常に普通体で書かれている（例(8)の文①の 部分。下線は引用者による。以下同様。）。

- (8) ①本稿は、国語学会平成9年度春季大会（於、〇〇大学）における口頭発表（「〇〇〇〇」）をもとにしたものである。**【位置付け】**②その席上、多くの方から有益なコメントをいただいた。**【恩恵】**③また、本稿をまとめるにあたって、〇〇先生、〇〇先生、〇〇先生、〇〇氏、〇〇氏から有益なコメントをいただいた。**【恩恵】**④記して感謝申し上げます。**【礼】**
（『国語学』192号より抜粋）

「位置付け」は、その論文が、論文執筆者の他の研究との関係においてどのような位置にあるかを説明した箇所である。これは野田氏による文の種類で言うと、事実文に相当する。したがって、他の部分に比べて読み手に対するはたらきかけが弱く、普通体になりやすいと考えられる。

4.2. 「礼」が常に丁寧体で書かれることについて

丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞では、「礼」は常に丁寧体で書かれている（例(9)の文③および例(10)の文②の部分）。

(9) (= (6))

①本稿は、第48回〇〇大学文学部日本文学科研究会での口頭発表の内容をまとめたものである。【位置付け】②研究会においては、諸先生方から有益かつ貴重な御助言を賜わることができました。【恩恵】③この場を借りて、感謝の意を表します。【礼】（『日本語教育』105号より抜粋）

(10) ①本稿をまとめるにあたり、〇〇氏、〇〇氏より有益なコメントをいただいた。【恩恵】②記して感謝申し上げます。【礼】

（『国語学』195号より抜粋）

「礼」は、礼を述べるべき相手に向けられた言語行為を表した部分である。野田氏による文の種類で言うと、伝達文に相当すると考えられる。この意味で、相手に対するはたらきかけの強い部分であると言える。さらに、論文の読み手の中に礼の相手が含まれている可能性がある。したがって、学術論文の謝辞の場合、書き手は礼の相手を含むであろう論文の読み手を強く意識することになり、その結果、この部分に丁寧体が使われやすくなると考えられる。

4.3. 「恩恵」が丁寧体で書かれる場合について

丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞において「位置付け」と「礼」が常に一定の文体で書かれるのに対し、「恩恵」は構成要素の組み合わせのタイプにより、丁寧体で書かれることもあれば、普通体で書かれることもある。

「恩恵」が丁寧体で書かれるのは、「位置付け＋恩恵＋礼」型と「位置付け＋恩恵・礼」型の2つの場合である。

まず、「位置付け＋恩恵＋礼」型の謝辞の例としては、例(11)があげられる（文②・③の部分）。

- (11) ①本稿は、平成八年度〇〇大学大学院比較文化研究科修士論文に基づき、国語学会平成九年度春季大会（於〇〇大学）で口頭発表した内容に、加筆修正を施したものである。【位置付け】②学会の発表席上また発表後において、多くの先生方に貴重なご意見、ご助言を賜わりました。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたり、〇〇先生、〇〇先生より様々なご教示を賜わりました。【恩恵】④心より御礼申し上げます。【礼】
(『国語学』192号より抜粋)

「恩恵」は、その論文を書くにあたって論文執筆者がどのような助言や協力を受けたかということを説明した部分である。野田氏による文の種類で言うと、事実文に相当すると考えられる。事実文であれば、「位置付け」と同様、常に普通体で書かれてよいように思われるが、例(11)のように丁寧体で書かれることがある。これには、「位置付け」と「恩恵」の次のような相違点が関わっていると考えられる。それは、「位置付け」が当該論文と論文執筆者の他の研究との関係という事実のみを説明した部分であるのに対し、「恩恵」は論文執筆者が当該論文の執筆に際し受けた恩恵を説明した部分であるため、必然的に礼を述べるべき相手を含む内容となるという点である。したがって、書き手は、礼を述べるべき相手を含むであろう論文の読み手を意識しやすく、その結果、「恩恵」の部分に丁寧体を使うことになるのではないかと考えられる。

「恩恵」が丁寧体で書かれる謝辞として、もう一つ、例(12)のような「位置付け+恩恵・礼」型の謝辞がある。

- (12) ①本稿は、平成9年度日本語教育学会秋季大会での発表原稿を元に、新たにデータを加え大幅に加筆・修正をしたものである。【位置付け】
②本稿で用いたデータを快く提供して下さった皆様に深く感謝致します。【恩恵・礼】
(『日本語教育』99号より抜粋)

この型の謝辞では、「恩恵」と「礼」が一文にあらわれ、文末には必ず「礼」の表現が来る（例(12)の文②）。「礼」は、4.2で見たように、常に丁寧体で書か

れる。したがって、「恩恵・礼」も常に丁寧体で書かれることになる⁽⁸⁾。

4.4. 「恩恵」が普通体で書かれる場合について

丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞のうち「恩恵」が普通体で書かれるのは、「位置付け＋恩恵＋礼」型と「恩恵＋礼」型の2つの場合である。

「位置付け＋恩恵＋礼」型の謝辞の例としては、例(13)がある（文②・③の____部分）。

- (13) ①本稿の一部を KLP（関西レキシコンプロジェクト）で発表した。【位置付け】②その際、〇〇先生はじめ、出席された方々から有益なコメントをいただいた。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたって、〇〇先生、査読者の先生方、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏からも貴重なコメントをいただいた。【恩恵】④記して感謝申しあげます。【礼】

（『日本語科学』5号より抜粋）

また、「恩恵＋礼」型の謝辞の例としては、例(14)があげられる（文①の____部分）。

- (14) ①本誌査読者から、有益な指摘・助言を種々受けることができた。

【恩恵】②深く感謝申し上げます。【礼】（『日本語科学』8号より抜粋）

以上の例に見られるように、「恩恵」が普通体で書かれることの要因としては、次の二つが考えられる。

一つは、論文執筆に際し助言や援助を受けたことを事実文として記すという書き手の姿勢である。

もう一つの要因としては、「恩恵」の文が後続する「礼」の文に内容的に従属しているということがあげられる。たとえば、例(14)の文①は、文②で述べられる「礼」の対象（すなわち何に対しての礼なのかということ）を表していると考えられる。したがって、内容的に文①は文②に従属していると言える。

つまり、例(14)の文章は二つの文に分かれてはいるが、内容的には次の一文と同じである。

- (15) 本誌査読者から、有益な指摘・助言を種々受けることができたことに
対して、深く感謝申し上げます。

このように「恩恵」が「礼」に内容的に従属しているということは、先に表1で見たことと関係する。すなわち、文章・談話を構成する文のうち、ほかの文に内容的に従属している文は、普通体になりやすいということである。したがって、以上見たことから、「恩恵」も普通体になりやすいと考えられる。なお、「恩恵」が「礼」に内容的に従属しているということは、本稿の調査対象である丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞16例のうち、例(16)のように「恩恵」と「礼」で一文となる例が6例あったことによっても裏付けられる(文②)。

- (16) (= (5))

①本稿は平成11年度日本語教育学会秋季大会における口頭発表の内容に加筆し、修正を加えたものである。【位置付け】②貴重なご意見、ご指摘を下された方々に心より感謝申し上げます。【恩恵・礼】

(『日本語教育』107号より抜粋)

5. 考 察

5.1. 野田(1998)による文の種類という観点からは説明がしにくい例

以上見たように、丁寧体と普通体の混用が見られる謝辞では、丁寧体と普通体のあらわれ方について、野田(1998)による文の種類という観点から一応説明がつくように思われる。しかしながら、本稿で調査対象とした謝辞の中には、それでは説明がしにくいものもある。それらは、文の種類としては同じであるにもかかわらず、使われている文体が異なるものである。

5.1.1. 「位置付け+恩恵・礼」型の謝辞における「恩恵・礼」の文

たとえば、例(17)は「位置付け+恩恵・礼」型の謝辞であるが、「恩恵・礼」の文を二つ含むものである。

- (17) ①本稿は、平成9年度秋季大会（於〇〇大学）において口頭発表した内容を改訂したものである。【位置付け】②席上、貴重なご意見を賜った方々に、お礼申し上げます。【恩恵・礼】③また、〇〇先生からいただいた有益なコメントが改訂のきっかけとなったことを記して、深く感謝します。【恩恵・礼】（『国語学』197号より抜粋）

例(17)の文②と文③が「恩恵・礼」の文である。これらは、野田氏による文の種類で言うと、伝達文に相当する。しかし、文②は普通体で、一方の文③は丁寧体で書かれている。

5.1.2. 「位置付け+恩恵+礼」型の謝辞における「恩恵」の文

また、前節でもふれたが、「位置づけ+恩恵+礼」型の謝辞において「恩恵」が丁寧体で書かれる場合と普通体で書かれる場合の両方がある。例(18)の文②、例(19)の文②・③はいずれも「恩恵」であるが、例(18)の文②は丁寧体で、例(19)の文②・③は普通体で書かれている。

(18) (= (6))

- ①本稿は、第48回〇〇大学文学部日本文学科研究会での口頭発表の内容をまとめたものである。【位置付け】②研究会においては、諸先生方から有益かつ貴重な御助言を賜わることができました。【恩恵】③この場を借りて、感謝の意を表します。【礼】

（『日本語教育』105号より抜粋）

(19) (= (8))

- ①本稿は、国語学会平成9年度春季大会（於、〇〇大学）における口

頭発表（「○○○○」）をもとにしたものである。【位置付け】②その席上、多くの方から有益なコメントをいただいた。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたって、○○先生、○○先生、○○先生、○○氏、○○氏から有益なコメントをいただいた。【恩恵】④記して感謝申し上げます。【礼】（『国語学』192号より抜粋）

つまり、これらは文の種類としては同じ事実文であるのに、一方は丁寧体で、もう一方は普通体で書かれているということである。

このように、文の種類としては同じであるにもかかわらず、使われている文体が異なるものについては、どのように説明すればよいのだろうか。

5.2. それぞれの謝辞の文章における礼の相手の表し方

ここでは、それぞれの謝辞の文章において、礼の相手がどのように表されているかに注目したい。というのは、文の種類が同じであっても、使われる文体が丁寧体であるか、あるいは普通体であるかによって、礼の相手の表し方にある傾向が見られるからである。

5.2.1. 「位置付け+恩恵・礼」型の謝辞における「恩恵・礼」の文の場合

まず、「位置付け+恩恵・礼」型の謝辞のうち「恩恵・礼」の文を二つ含む謝辞の文章（例(20)）について見てみる。

(20) (= (17))

①本稿は、平成9年度秋季大会（於○○大学）において口頭発表した内容を改訂したものである。【位置付け】②席上、貴重なご意見を賜った方々に、お礼申し上げたい。【恩恵・礼】③また、○○先生からいただいた有益なコメントが改訂のきっかけとなったことを記して、深く感謝します。【恩恵・礼】（『国語学』197号より抜粋）

※ を付した部分は、書き手が礼を述べるべき相手を記した箇所である。

以下の用例についても同様である。

例(20)のそれぞれの「恩恵・礼」の文で礼の相手がどのように記されているかを調べてみると、普通体で書かれている文②では「貴重なご意見を賜った方々」となっている。一方、丁寧体で書かれている文③では「〇〇先生」となっている。

5.2.2. 「位置付け+恩恵+礼」型の謝辞における「恩恵」の文の場合

次に、「位置付け+恩恵+礼」型の謝辞における「恩恵」での礼の相手の表し方を見てみる。

まず、「恩恵」が丁寧体で書かれている場合であるが、このような例は本稿の調査対象では2例あった。たとえば、例(21)では、礼の相手は「諸先生方」と記されている（文②）。

(21) (= (6))

- ①本稿は、第48回〇〇大学文学部日本文学科研究会での口頭発表の内容をまとめたものである。【位置付け】②研究会においては、諸先生方から有益かつ貴重な御助言を賜わることができました。【恩恵】③この場を借りて、感謝の意を表します。【礼】

（『日本語教育』105号より抜粋）

また、例(22)でも同じく、礼の相手は「多くの先生方」（文②）、「〇〇先生」（文③）となっている。

(22) (= (11))

- ①本稿は、平成八年度〇〇大学大学院比較文化研究科修士論文に基づき、国語学会平成九年度春季大会（於〇〇大学）で口頭発表した内容に、加筆修正を施したものである。【位置付け】②学会の発表席上また発表後において、多くの先生方に貴重なご意見、ご助言を賜わりました。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたり、〇〇先生、〇〇先生より様々なご教示を賜わりました。【恩恵】④心より御礼申し上げます。【礼】

（『国語学』192号より抜粋）

一方、「位置付け＋恩恵＋礼」型の謝辞で「恩恵」が普通体で書かれている場合であるが、このような謝辞は本稿の調査対象では3例あった。これらの謝辞の場合、礼の相手は「〇〇先生」と特定される人物を含むが、それだけではない。たとえば、例(23)では、礼の相手は「〇〇先生」(文②・③)、「出席された方々」(文②)、「査読者の先生方」(文③)、「〇〇氏」(文③)と記されている。

(23) (= (13))

①本稿の一部をKLP(関西レキシコンプロジェクト)で発表した。【位置付け】②その際、〇〇先生はじめ、出席された方々から有益なコメントをいただいた。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたって、〇〇先生、査読者の先生方、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏からも貴重なコメントをいただいた。【恩恵】④記して感謝申し上げます。【礼】

(『日本語科学』5号より抜粋)

また、例(24)では、礼の相手は「多くの方」(文②)、「〇〇先生」(文③)、「〇〇氏」(文③)と記されている。

(24) (= (8))

①本稿は、国語学会平成9年度春季大会(於、〇〇大学)における口頭発表(「〇〇〇〇」)をもとにしたものである。【位置付け】②その席上、多くの方から有益なコメントをいただいた。【恩恵】③また、本稿をまとめるにあたって、〇〇先生、〇〇先生、〇〇先生、〇〇氏、〇〇氏から有益なコメントをいただいた。【恩恵】④記して感謝申し上げます。【礼】

(『国語学』192号より抜粋)

5.3. 特定の個人に対する謝辞か否か

これらの例から、謝辞の構成要素である「恩恵」および「恩恵・礼」では、礼の相手が「先生方」というように、明らかに書き手よりも立場が上の人物であり(例(21)の文②、例(22)の文②)、さらに「〇〇先生」という形で、ある個

人に特定できる場合（例(20)の文③、例(22)の文③）、丁寧体が使われやすいのではないか。このような場合、書き手は自分と礼の相手との関係を意識し、礼の相手を含むであろう論文の読み手を丁寧に遇した方がよいと判断して、その結果、丁寧体を使うことになると考えられる。

一方、礼の相手が複数存在し、ある個人に特定しにくい場合、普通体が使われやすくなると考えられる（例(23)の文②・③、例(24)の文②・③）。

例(25)の文②のように、礼の相手が「〇〇氏」という形で個人に特定してあっても、普通体が使われる場合がある。これは、礼の相手が複数示されていることが関わっていると考えられる。また、例(25)の文③のように、礼の相手を「先生方」と記してあっても普通体が使われる場合がある。この場合、礼の相手は書き手より立場が上の人物であるが、やはり、複数存在し、個人に特定できないことが、丁寧体ではなく普通体が使われることの要因となっているのではないかと考えられる。

- (25) ①本稿は平成11年度国語学会春季大会（於：〇〇大学）における研究発表をもとに加筆・修正したものである。【位置付け】②研究発表の折には、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏の各氏から有益なコメントを頂戴した。【恩恵】③また、査読して頂いた先生方のご教示によって、有益な修正を施すことができた。【恩恵】④記して感謝申し上げます。【礼】
- （『日本語科学』8号より抜粋）

ただし、例(21)の文②、例(22)の文②のように、礼の相手が個人に特定されていなくても、丁寧体が使われることがある。したがって、正確には、礼の相手が個人に特定されていないということは、その逆の場合よりも、より普通体が使われやすい環境になっていると言うべきであろう。

6. まとめ

これまでの考察で明らかになったことをまとめると、次のようになる。

- ①丁寧体と普通体が混用されている謝辞の場合、謝辞の構成要素によって、使われる文体に傾向が見られる。
- ②謝辞の構成要素ごとの文体のあらわれ方の傾向は、野田（1998）による文の種類という観点から説明可能である。
- ③同じ構成要素を含む文（すなわち文の種類が同じ文）でありながら、文体が異なるものについては、その文が、書き手よりも立場が上の人物、特に特定の個人に向けられたものかどうかということが関係していると考えられる。

学術論文の謝辞では、礼を述べるということを、論文の本文と同じ姿勢で、一つの客観的事実として記すことが可能であるし、また、礼の相手を意識して、丁度手紙のように直接礼を述べる形で記すことも可能である。このような謝辞の文章の持つ読み手の設定の仕方の自由さが、謝辞の文体が一定でないことに関わっているのではないかと考えられる。

- 注(1) 実際には、謝辞の文章は、「謝辞」もしくは「付記」と明記された後に記されたり、「注」の一つとして記されたりするのが一般的である。なお、本稿で使用する用例については、考察に直接関係する謝辞の文章部分のみを提示する。
- (2) 本稿では、用例にあらわれる固有名詞については、考察の内容とは関係しないため、場合によってはこのように省略した形で記す。
 - (3) 本稿で言う「文体」とは、村岡（1996）における定義にもとづく。すなわち、文体とは、「話し手や書き手の表現したい内容を状況に応じて効果的に伝達するための表現形式である」（村岡（1996：p.264））。この定義にもとづき、本稿では、特に文章における丁寧体と普通体の使用に焦点を当てる。
 - (4) 詳しくは黒木（2001）を参照されたい。
 - (5) 謝辞が記されている論文の数と謝辞の総数とが異なるのは、論文によっては注の中で二箇所にわたって謝辞を記したものがあり、それらを別個のものとして数えたことによる。
 - (6) 黒木（2001）で調査した論文206編のうち、本文が丁寧体、もしくは丁寧体と普通体の混用、で書かれていたものは皆無であった。
 - (7) この型に該当する例の中には、「恩恵・礼」の文を二つ含み、一方の文が普通体で書かれているものが1例あった。この例については、次節で考察する。

- (8) ただし、これは、「恩恵・礼」の文を一つしか含まない謝辞についてのみ言えることである。(7)で述べたように、本稿の調査対象の中には、「恩恵・礼」の文を二つ含み、一方の文が普通体で書かれているという例がある。この例における二つの「恩恵・礼」の文の文体の違いについては、次節で考察する。

参考文献

- 生田少子・井出祥子 (1983)「社会言語学における談話研究」『言語』12-12 pp.77-84 大修館書店
- 黒木晶子 (2001)「日本語の文章における丁寧体と普通体の使い分けについて—学術論文における謝辞の文章の分析を通して—」『文教国文学』45号 pp.110-122
- 仁田義雄 (1991)「言表態度の要素としての丁寧さ」『日本語のモダリティと人称』pp.185-202 ひつじ書房
- 野田尚史 (1998)「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194号 pp.89-102 国語学会
- 村岡貴子 (1996)「文体の指導」『日本語学』7月臨時増刊号 pp.263-267
- メイナード・K・泉子 (1991)「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20-2 pp.75-80 大修館書店

(本学講師)